認定／特定非営利活動法人　国際協力 NGO・IV-JAPAN　Newsletter　2021.4.30 発行

IV-NEWS

Vol. 41

ラオスのコロナ対策　－ WHO 日本人医師の活躍 －

ラオス医療関係者に指導する WHO 窪田医師

国境閉鎖から 1 年となるラオスでは、今も国外からの定期航空便の運航はありませんが、臨時便として、月数回ビエンチャンと韓国のインチョンを結ぶ便、それに WFP＝国連世界食糧計画の人道支援便が運航されています。今回私は、幸い国際協力 NGO ということで、WFP 便に乗り、ラオスへ渡航することができました。そして 2 週間にわたるホテルでの隔離も終わり、3 月 14 日にようやくビエンチャンの自宅に帰ることができました。隔離中はホテルの部屋からは一切出られず、朝夕の検温はドアー越しで、食事も交換シーツも外の廊下のテーブルに置いていきます。

このような厳しい対策が功を奏してか、ラオス国内の新型コロナ感染者の数は、3 月 24 日現在 49 人です（※2021 年 5 月 16 日現在　感染者 1591 名　死者 2 名）。

それも WHO ラオス事務所の活躍のおかげかと思います。WHO ラオス事務所には、世界各国から集まった 60 数名の医療関係者が勤務しておりますが、健康危機対策班チームリーダーの日本人女性医師をはじめ、新型コロナに関する仕事では、数十人の内、6 人の日本人医療従事者が活動しています。43 歳の医師、窪田祥吾（くぼた・しょうご）さんの活躍をご紹介したいと思います。

窪田さんは、去年 4 月 1 日に始まった全国ロックダウン当初から、1 か月半の間に、全国 17 全ての県の病院で院内感染予防と治療のトレーニングを行いました。その中では、「病院のスタッフの健康と安全」を守るための講義も行い、最初は感染を恐れていた受講者もこれで自信をつけたと聞きます。実際、トレーニング初日の朝と、最終日の夕方に行うシミュレーションでは、見違えるようにしっかりとした感染防御と治療が出来るようになったそうです。また窪田さんは、コロナ禍にあっても通常と同じく必要となる、妊婦の健診や、出産、小児健診、内科外来などなどの支援や、県や郡知事を巻き込んだ、保健セクターを越えた自治体の対策強化なども行っています。特に広報の大切さを重視し、正しい情報を伝え、簡単で分かり易いメッセージを村民に提供することを自治体に指導したそうです。

窪田さんはラオ語もお出来になり、医療関係者との交流もスムースにでき、何よりラオスでお役に立ちたいという情熱が効果をもたらしていると思います。

ラオスがうまく抑え込めている背景については、窪田さんの個人的見解として、3 つのポイントを指摘なさっていました。①まず、政府の対応が早く、党の指令系統も強いため、政府の決定事項が全国の隅々まで速やかに伝達されることがあるようです。例えば、昨年 3 月に初めての国内症例が出る前に観光ビザ発給を中止しましたし、10 例に満たない間に全国的なロックダウンが決定されました。因みに窪田さんのチームは、ロックダウン初日から全国の病院を回りはじめましたが、県・郡境はもちろん、各村の入り口にも検問所が設けられ、何度も車を止められ、指揮系統の強さに感心した、ということです。

②人口密度が低いということです。ラオスは 1 キロ平方メートルあたりおよそ 30 人で、これは日本の 10 分の 1 以下です。

③国境や隔離施設などでの水際対策を強化し、症例が見つかれば、すぐにその地域全体をロックダウンするというやり方が功を奏しているのではないか、ということでした。例えば、今年 1 月に、北部で不法入国者の陽性例が出た時は、すぐにその郡全体がロックダウンされました。*(P7 へ続く)*

外務省 日本 NGO 連携無償事業

都市封鎖（ロックダウン）下のホスピタリティ・介護研修生

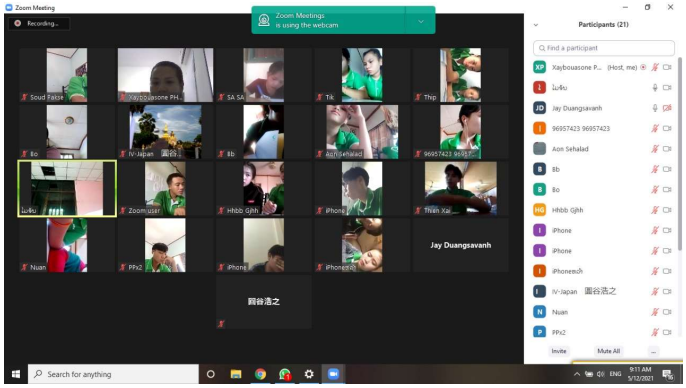
4 月中旬のラオス正月までは累計感染者が 50 名に届いていなかったラオスですが、お正月休みで国外から帰省したラオス人、不法入国した隣国人によって市中感染が発生。初の死者も出てしまいました。現在、4 月 22 日から延長措置を経て 5 月 20 日まで人の移動が制限されています。各種学校も閉鎖命令が出され、研修生 22 名のうち 3 名は自宅待機、19 名は寮で待機しています。第１期生から選抜したトレーナー2 名が研修センターに寝泊まりして毎日、研修生の体温測定などの体調管理をしています（写真 1）。

研修は、ラオスの職業訓練の一環として行っており、修了時には地方政府から修了証書が発行され、就職の際に有利となります。担当部局に聞くと職業訓練という性格上、実習が中心となるのでオンラインでの授業は単位の認定要件としない、とのことですが試みにオンラインでホテル業務や介護の概論などをトレーナーに講義してもらっています（写真 2）。

最初はちゃんとできるのかな、と思っていましたがデジタル・ネイティブと呼ばれる世代、慣れた様子でスマホでオンライン授業を受けています。逆に講師陣が操作方法を画面越しに教わっているくらいです。教室での授業は講義と実習、さらには簡単なゲームを組み合わせて眠くならないように、飽きないようにと工夫をしていますが、オンラインだとそのような工夫がしにくく、どうやら半日が限度のようです。オンライン以外の時間は自習したり、みんなと夕食を作って食べたりと楽しんでいます（写真 3）。

オンライン授業の可能性が確かめられたのは収穫でしたが、やはりみんなで顔を合わせて授業や実習を行いたいですね。

↑　写真 1　研修生の体温を測定するトレーナー



↑↓　写真 2　オンライン授業の様子

↑　写真 3　夕食の様子

JICA 木工事業　地方の職業訓練校に行ってきました！

2019 年にラオス職業開発機関（以下、VEDI）と家具作りのトレーニングを実施しましたが、その後の 2021 年 3 月、トレーニングに参加した 10 校のうち、サラワン県、サワンナケート県、カムワン県の職業教育校の木工科教員の指導の様子をモニタリングしてきましたので、それぞれの学校の活動を紹介します。

１．サラワン県職業教育校

ホゾ穴のあけ方を指導

木工科教員のソムサイ先生が、トレーニングに参加しました。学校では、木工を教えているものの、専門は建築という先生のため、トレーニングの内容をどれくらい学校で実践できているか不安な部分がありました。この不安が当たった部分もあり、トレーニングのときは少し違う方法で家具作りを行っていました。しかし、IV-JAPAN の木工トレーナーと VEDI の木工科教員が、正しい方法を伝えたところ、もう一度学生に正しい方法で指導をしてくれました。ラオスの木工教育は、学校によっては建築学科とまとめられていることがあります。そのため、せっかく学生が木工を学びたくて入学したのに、木工専門の先生がおらず、専門的に学ぶことができないという問題が発生することがあります。

２．サワンナケート職業教育校

遊具（シーソー）の製作を指導

木工科教員のピントーン先生がトレーニングに参加しました。ピントーン先生は、木工の家具作りそのものより、パソコンを使ったデザインを得意とする先生です。トレーニング参加当初は、木工機械の扱い方にぎこちない部分が多く見られましたが、トレーニングを通して正しい木工機械の使い方を学び、自信をもって木工機械を使えるようになりました。トレーニング終了後には、家具製作の様子を SNS に投稿してくれていて、今回のモニタリングでピントーン先生の授業を見るのをとても楽しみにしていました。

しかし、スイス支援の村落部の小学校の教育環境整備プロジェクトに従事しているため、モニタリング実施場所が職業教育校ではなく、村落部の小学校となってしまいました。大型の木工機械がない中、電動手工具のみを用いて、木製の遊具（滑り台とシーソー）を製作していました。小学校の校庭という環境の中のため、精巧な家具作りはできていませんでしたが、電動手工具の使用方法等を、安全な使い方を含め、適切に指導している様子を見ることができました

３．カムワン県職業教育校

組手の作り方を指導

木工科教員のコンサワン先生が、トレーニングに参加しました。コンサワン先生は、彫刻も得意な木工科教員で、木工の技術が高いだけでなく、製作した家具に彫刻を施すこともできます。SNS に、トレーニングで製作したキャビネットを学校で製作し、彫刻を施した様子を投稿してくれていました。今回のモニタリングでも、トレーニングで習得した知識や技能を、学生が理解できるように丁寧かつ明確に説明していることが分かりました。特に、日本人木工科専門家が強調していた、最初に裁断する場所や、ノミをいれる場所に正確に線を書き込むことが何よりも大切であるということを学生にしっかり指導していました。ラオスでも、もっとも知識・技能が高い木工科教員の一人です。

サラワン県、サワンナケート県、カムワン県のそれぞれの先生は、得意とすることも、それぞれの知識や技能も違いますが、皆がトレーニングで学んだことを学生に伝えようとする姿を見ることができました。

IV-JAPAN 初　オンライン海外実習！

今回、オンラインで海外実習のお手伝いをしましたが、最初は映像と音声のみでどのくらい臨場感が出せるのか不安でした。でも当日は調理研修（出汁巻き卵）とベッドメイキングの日だったため研修生に動きがあったこと、また料理は口を滑らかにさせる効果があるからでしょうか、研修生にインタビューするといい答えが返ってきました。学生さんからもいい質問が次々と出てきて臨場感あるオンライン授業ができました。

高崎経済大学経済学部国際学科 3 年　片山結月

私は、今回のオンラインでの実習で、実践教育の重要性を学びました。貧困地域の人たちが自立的な生活を送るためには、「働く」ことができる人を育てることが必要不可欠です。そのための活動として、IV-JAPAN が行う職業訓練の一部を拝見しました。

そこで私が感じたのは、研修生一人一人が活き活きとしていることです。例えば、初めて作る出汁巻き卵の作業では、戸惑いながらも楽しみつつ、真剣に取り組んでおられました。また、研修生の皆さんは卒業後に何をしたいのかをはっきりと決めていました。将来の進路を決められない私にとって驚くべきことでした。ご自身がこの研修で学んだことを生かして社会で働き、家庭を支えたいという思いがあるからこそと思います。このような思いを持った生徒が多いためか学ぶことを楽しむ雰囲気がとても伝わってきました。学ぶことは貧困から抜け出すための手段であるだけでなく、人の心を豊かにするものでもあると実感しました。

新型コロナウイルスの感染がまだまだ収まらない世の中ですが、今回オンラインという新たな形によってこうして IV-JAPAN の皆様と交流できたことは大変貴重な経験となりました。コロナが終息した際には是非とも実際に訪問をさせて頂きたいと願っております。今回は誠にありがとうございました。

経済学部国際学科教授　野崎謙二

私はこれまで学生の視野や見分を広げるため、休み期間に海外での実習活動を行ってきました。パンデミックにより人の移動が厳しい制約を受ける中、せめてオンラインで海外の雰囲気を感じてもらいたいと考えている時に、これまで何度か訪問させていただいていた IV-JAPAN の冨永代表からお力添えいただけるという話をいただき、今回の実習が実現しました。当日は、代表のご高話を拝聴できただけでなく、プロジェクトマネージャーの園谷様のご配慮で、研修の様子を見たり研修生の声をお聞きしたりすることができ、オンラインでありながら非常に臨場感のある体験ができました。学生が自分自身のことを見つめ直す機会をいただき、心よりお礼を申し上げます。

役員紹介 － ラオス国立大学経済経営学部の創設支援の物語 －

ラオスの総合国立大学は 1995 年秋に創設されました。それ以前には医・工・農などの単科大学はありましたが、経済・経営系の大学はありませんでした。カムタイ元大統領の強い希望で、経済系の学部を日本の支援で創ってほしいという公式要請が日本政府にきました。外務省から私が指名され、一人で何度か現地の調査に行きました。キャンパスは旧師範学校で、最初に見たときは学生よりも放牧された牛や鶏などの数の方が多いというのんびりしたものでした。新学部の教員候補は旧単科大学から集められた 7 名で、建物も教科書も何もありません。外務省は、日本が社会科学系の学部立ち上げを支援した経験がなく、当初は懐疑的で、私の調査次第で、しかもカリキュラムや教科書作成の支援程度を想定していました。しかし、ラオス側には教室棟の建築も含めて学部のすべてを立ち上げてほしいという強い希望があり、私もやる気になって、その旨を外務省に勧めました。それならば日本のプレゼンスを示す「日本センター」（当初は「ラオス・日本人材育成センター」と呼称）とセットでハコモノ（学部とセンターの建物）も作り、技術協力に無償資金協力を加えるという話に進展しました。総額 20 億円を超えるプロジェクトで、当時の ODA だからこそ可能だったと思います。それでも、決定されるまでに約 1 年半が経過しました。

学部入り口の記念石碑

ラオスでは最初の経済・経営の教科書

当初は，勤務先（神戸大学）の協力体制もできておらず、私にとっては綱渡りのような、時には厳しい事態も経験しました。日本から多くの先生を交代で派遣して教科書の作成支援が必要です。また、教員の量と質を迅速にレベルアップするために、日本やタイ等の大学院への留学を実現するために駆けずり回りました。当時、ラオスからの日本留学中の院生はまだ少なく、大阪大学で交通工学の修士課程に国費留学していた P 君を説得、指導教授の許可も得て神戸大学の博士課程に移籍してもらい、私の指導の下で経済学博士を取得しました。教員も現在では 100 名を超え、昨年からその P 君が学部長を務めています。卒業生も 1 万名を超え、ラオスの経済発展を担う人材として各分野で活躍しています。

（IV-JAPAN 理事　豊田利久）

豊田利久理事

瑞宝中綬章おめでとうございます！

豊田利久理事には IV-JAPAN の前身「国際ボランティアの会」が 2003 年に NPO 法人を取得したときから、2020 年度まで理事に、2021 年度からは顧問をお引き受けいただいております。豊田氏は 1999 年ラオスに経済経営学部を創設なさるためにご家族で赴任なさり、ラオスには国際高校がなく、お嬢様のタイ国進学時にお手伝いしたのが始まりでした。阪神淡路大震災で被災なさったのがきっかけで、震災復興経済にも精通し、世界の被災地を調査活動し、提言を発信していらっしゃいます。世界的に有名な経済学者である豊田氏に IV-JAPAN の活動に関わっていただき、大変ありがたく、皆様に受賞のお知らせをさせていただきました。（冨永）

幸子のラオスだより　−ラオスの野生象の危機−

野生象の親子（写真提供 WWF）

水浴びが大好きな飼育象の親子

以前、日本とラオスの友好のシンボル事業として、ラオスから京都市動物園に貴重な子どもの象 4 頭が贈られたことがありますが、「ラオスの野生の象」の現状についてお話します。

ラオスは、14 世紀半ばから 18 世紀初頭まで「ランサーン王国」が存在していました。「ランサーン」というのは、ラオ語で「百万頭の象」という意味です。それほど象が多かったわけですが、現在は野生の象の数が激減し、保護に携わる関係者は、危機感を抱いています。現在、ラオス国内に生息する野生の象は 300 頭～500 頭とラオス林野局は見ていますが、動物保護団体では、300 頭以下ではないかと見ています。今後個体調査をして野生象の正確な頭数を把握する予定だそうです。飼育象は 420 頭います。

象のオスは生後 14 − 15 年で性成熟します。メスは生後 17 − 18 年で初産を迎える象が多いそうです。妊娠期間が 23 か月間だそうですので、出産まで 2 年近くかかります。京都市動物園に寄贈されたのが、オス 1 頭とメス 3 頭で、お互いの相性もあるようですから、うまくマッチングするかは今後の課題です。ちなみに象の寿命は 60 − 80 年と考えられています。

野生象の数が激減してしまった理由を WWF（世界自然保護基金）の研究員 ミア・タカイ・サインズさんにお聞きしたところ、一番の原因は、象が住んでいた森が耕作地に変わったり、水力発電のダム開発によって森が失われたことによるそうです。また、焼き畑によって餌が少なくなり、餌を求めて人里に出てきて作物を食べ荒らすので、住民が殺処分したりすることも、大きな理由で、最近も 2 頭の野生象が殺処分されてしまったそうです。1950 年代には、ラオスの国土面積の 70%ほどを森林が占めていたそうですが、1990 年代には 50%を切ってしまいました。ラオス政府は、2025 年までに森林率を再び 70%に回復させる目標を立てています。野生象は 1 日に体重の 10%の食糧を食べるそうです。野生象の平均体重は、オスで 4 トン、メスで 3 トンくらいですから、1 頭につき 1 日に３00～４00kg の食糧が必要です。

WWF では、象が人里に出ないように農民にミツバチの飼育を進めているそうです。というのも、象は蜂が大嫌いで、蜂がいると逃げるからです。また、象の嫌いなレモンやトウガラシのような野菜を植える試みがインドで成功しているので、それらを植えてみたり、象を追い払うための「ピンポン爆弾」も、今後導入が予定されています。「ピンポン爆弾」というのは、ピンポン玉に唐辛子の粉を入れたもので、エアーガンで撃って象に当たると、象は唐辛子の粉が目や鼻に入るのが嫌で逃げるそうで、アフリカで取り入れている方法だそうです。

野生象が生きていくための環境を取り戻す活動も、行われています。林野局では、全国に 25 ヵ所ほどを野生動物保護区に指定し、人が立ち入らないようにして、象をはじめ希少動物の保護を行っています。野生象の主な生息地は、ラオス北西部、メコン川西岸に位置するサニャブリ県や、ベトナムとタイに挟まれたラオス中南部、そしてカンボジアとの国境近く、ほかには、ラオス北部のベトナム・中国との国境近くなどです。

中でも、2011 年にサニャブリ県にできた ECC（民間象保護センター）では、現在、34 頭の象が保護されていますが、オスが少なく繁殖に苦労しているようです。また、センターに併設されたラオスで初めてとなる象専門の病院では、保護されるまでに象が受けた過重労働や、様々なストレスからの疲労回復や心の傷を癒す活動にもあたっています。さらに、保護センターでは、運営費用や、象使いの生活扶助のために「エコツアーキャンプ」も実施しています。

象にとっては苦痛の鞍や椅子置き象乗り体験

保護センター内にある宿泊施設に泊まりながら、象の生活リズムや要求に、人間が合わせることで、象をゆっくり観察することができます。観光地では、よく「象乗り」体験をすることができますね。私もお話をお聞きするまで知らなかったのですが、象の背中に鞍やいすを設置して人間を乗せるのは、背骨に当たって痛いそうで、とても苦痛なのだそうです。観光客向けのショーなどがあるのではなく、象の生活に寄り添う体験ができます。センターには、過重労働から保護された象もいます。

私もかつて目にしたことがあるのですが、2001 年、当会が、サニャブリ県のヤイ村に小学校を建てた時、完成式に出席するときにヤイ村は山の上なので、ふもとで 1 泊するのですが、ゲストハウスが 1 軒しかなく、夜中にネズミがちょろちょろしてとても怖かったことがあります。ヤイ村へ行く途中で切り出した丸太を運び出している象にも出会いました。20 年前のことですが、当時のサニャブリ県には、働いている象がまだいました。同じくサニャブリでは、観光収入を目的とした「象祭り」が、毎年 2 月、3 日間にわたって開催され、観光客がたくさん来ます。コロナ禍の今年は 1 日に短縮しての象祭りでした。象牙の違法取引を目的とした密猟による被害は、アジア象ではないようです。 密猟の対象となっているのは、アフリカ象だそうです。アジア象は牙が短く、また、メスのアジア象には牙がないため、密猟の被害は少ないそうです。ただ、アジア、特に東南アジアは、環境の変化に伴う生物多様性の危機が、最も深刻だそうです。ラオスには、WWF や ECC のほかにも、WCS（野生動物保護協会）、アノラック（保護のラオ語）協会、IUCN などの民間団体が野生動物保護活動をしています。野生動物の個体数の回復や、地域住民の環境保全意識の向上、住民の持続可能な生計の維持など、活動は多岐にわたります。また、次世代の動物が繁栄できる場所を確保するため、土地を購入している団体もあります。

今回お話を伺ったミア・高井・サインズさんと知り合ったのは、偶然でした。ラオスに入国して、2 週間の隔離のため、空港から専用のバスに乗ってホテルに向かうとき、バスでご一緒だった方が、WWF の専門家で、アメリカ人のミアさんをご紹介下さったのです。ミアさんのお母さんは日本人で、現在日本にお住まいとのことです。しかも、その WWF の専門家の方にも、実は 10 年前に、一度お会いしていたことが分かりました。人の出会いって、何がご縁になるか分かりませんね。

（*P1 の続き*）ワクチン接種は日本と同じく、まずは 15 万人の全国の医療従事者を、3 月から 4 月にかけて実施する予定です。中国からワクチンの寄付がすでにあり、医療従事者に始まり、次に軍人、警察官、公務員や教師 4 万人以上が受けています。ユニセフが調達した 48 万個のワクチンも 3 月 21 日に最初のバッチがラオスに到着しました。その中には日本も協力したワクチン冷凍庫 200 万ドル（約 2.2 億円）分が入っています。

その一方で、物理的な距離をとることや、石鹸による手洗い、マスクの着用などの効果的な公衆衛生対策を奨励しているのは日本と同じです。実は 2009 年に、早稲田大学や三菱化学の寄付で、当会が南部チャンパサック県のノンビエン小学校を建設したときに、早稲田の学生さんたちがボランティアで「手洗い歌」を作詞・作曲して、小学生に広めました。今年、コロナ禍もあって、その復刻版を後輩の学生さんたちが作りました。11 年も早稲田の学生さんたちの活動が続いているのは素晴らしいです。

ワクチンがラオスに到着

お知らせ

NHK ラジオマイあさ放送：6 月 4 日（金）午前 8 時 6 分～ラオス便りです。
聴き逃しサービスで放送後 1 週間聞くことができます。　https://www.nhk.or.jp/radio/ondemand/

お知らせ

IV-JAPAN のホームページ上で、「国際協力費・運営費」のみクレジットカードによる寄付ができるようになりました。
継続ではなくその時々でご寄付頂く「今回 1 度限りの寄付」と、選択して頂いた金額を毎月ご寄付頂く「毎月定額の寄付」の 2 つのご寄付の方法を用意しています。
詳しくは弊会ホームページをご覧下さい。
https://iv-japan.org/participation_and_donation/donation/

【寄付者一覧（2021 年 1 月 1 日～2021 年 3 月 31 日）※敬称略

【 チャンパー山の民奨学金　寄付者一覧 】

栗林　聡（60,000 円）、石坂　幸子（60,000 円）、高岡万葉ロータリークラブ（300,000 円）

【 カノック奨学金　寄付者一覧　1 口 12,000 円】

奈良　伊世（1 口）、蛭間　愛子（1 口）、根橋　淑江（1 口）、伊東　慶子（1 口）、込山　まち子（1 口）、生駒　和夫（1 口）、黒田　歩・浩己（1 口）、西条　喜子（1 口）、中澤　達夫（1 口）、中田　みどり（1 口）、春日　曠（1 口）、小林　佳代子（1 口）、上原　望（1 口）、河島　一郎（1 口）、又吉　ミチ（1 口）、宗像　邦司（1 口）、廣田　知彦（1 口）、大橋　國江（2 口）、高見沢　啓二（2 口）、濱口　敏行（2 口）、大野　宏江（3 口）、嶋　美喜子（4 口）、渡久地　澄子（5 口）

【 国際協力費・運営費　寄付者一覧　※2,000 円未満は省略させて頂きます。】

蛭間　愛子（3,000 円）、嶋　美喜子（2,000 円）、込山　まち子（8,000 円）、原國　倍子（3,000 円）、中田　みどり（3,000 円）、齋藤　友美恵（2,000 円）、（有）イチカワ北海食品（10,000 円）、生田　英生（10,000 円）、小林　佳代子（3,000 円）、上田　義朗（3,000 円）、小林　愛子（3,000 円）、高倉　昌子（3,000 円）、大野　宏江（4,000 円）、冨永　幸子（50,000 円）、森田　豊則（5,000 円）入江　利恵子（5,000 円

【 ドナー募集 】

○カノック奨学金、国際協力費・運営費、チャンパー山の民奨学金、各ドナーを随時募集しています。

①カノック奨学金ドナー　　12,000 円（1 口）以上
②国際協力費・運営費ドナー　個人:3,000 円以上／団体・法人:10,000 円以上
③チャンパー山の民奨学金　　60,000 円（1 口）以上

○申込方法　※銀行振込の方は事務局までご住所等詳細をお知らせください。

郵便振替　：（口座番号）　00140-5-537168　**（加入者名）IV-JAPAN**
銀行振込　：埼玉りそな銀行浦和中央支店　普通預金　口座番号:5038052
名義人：（特非）国際協力 NGO・IV－JAPAN

認定・埼玉県指定　特定非営利活動法人　国際協力 NGO・IV-JAPAN

当会へのご寄付は、寄付金控除の対象になります。

日本事務局
〒330-0856　埼玉県さいたま市大宮区三橋 2-545-2-101
TEL/FAX:048-622-8612
E-mail: iv-japan@vanilla.ocn.ne.jp
https://iv-japan.org/

ラオス事務所
P.O Box7920 Vientaine, Lao PDR
TEL/FAX : +856-21-316047
E-mail: ivjapan.vte@gmail.com

アカウンタービリティ
セルフチェックマーク